

令和 5 年 4 月 25 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03017

研究課題名（和文）短期留学が学習者の意識に与える影響と「学びの意識化フレームワーク」の構築

研究課題名（英文）The Impact of Short-term Study Abroad on Learners' Consciousness and the Construction of a Learning Consciousness Framework

研究代表者

前田 ひとみ（MAEDA, Hitomi）

目白大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30458575

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は留学が与える影響に関する質的調査として留学した学生18名を対象に異文化観の変容と留学の教育的効果（短期的影響と長期的影響）の視点から個人的態度構造分析を使用し包括的に分析した。研究の結果、留学は、まず個人における認知や知識面、意識や価値観に影響を及ぼし、その後1年をかけて長期的に被験者の行動面（積極的に became、自信がついた等）に影響を与えた可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学習者の視点から短期留学が学習者の意識に与える影響を短期的・長期的視点から調査し、留学の教育的効果が可視化できたことは意義の一つである。またそれにより得られた知見をもとに「学びの意識化フレームワーク」とし、プロセスの一環で学習者自らが自身を分析し、留学での学びが可視化・意識化されることで学習者自身の変化や成長、留学による学びを学習者個人が確認できる仕組みを作ったことも意義の一つであるといえる。

研究成果の概要（英文）：This qualitative study on the impact of studying abroad comprehensively analyzed 18 students who studied abroad from the perspectives of cross-cultural change and the educational effects of studying abroad (short-term and long-term effects) using personal attitude construct analysis. The results of the study indicated that study abroad may have first affected the individual's cognition, knowledge, awareness, and values, and then had a long-term effect on the subject's behavior (e.g., increased positivity, confidence, etc.) over the course of one year.

研究分野：異文化教育

キーワード：異文化理解 異文化コミュニケーション 高等教育 比較文化 国際理解教育

## 1．研究開始当初の背景

**日本人の国際的素養（短期留学状況・語学力の現状・国際経験の現状）：**グローバル化が進む中、英語コミュニケーション能力の育成に対する社会的ニーズは高まってきているが、現況はグローバル人材に必要不可欠だとされる日本人の語学力や国際経験は他のアジア主要国と比較しても低いことが指摘されている。例えば、語学力（英語）に関していえば、TOEFL では 163 か国中 135 位（アジアの中では 30 か国中 27 位）、国際経験の機会では、諸外国から海外へ留学する学生数は増加する傾向にある一方で、日本だけが減少傾向にあり 2011 年度日本からの留学者数 5.75 万人に対し、中国から海外への留学者数は 72.3 万人（人口比を考慮すると日本の 1.2 倍）、また韓国から海外への留学者数は 13.9 万人であり（人口比を考慮すると日本の 6.2 倍）、近隣諸国と比較しても楽観視できない状況であるといえる。

**異文化理解能力の獲得：**異文化理解能力は呼称も含め研究者間で定義が分かれているが、Byram（1997）は異文化理解能力の構成要素として（１）態度（attitude）、（２）知識（knowledge）、（３）比較、解釈する技能（skills）をあげ、Deardorff（2008）は異文化適応能力には多くの要素が含まれるとし、その例として 20 以上もの要素をあげている。また日本の研究者の間で幅広く知られている異文化理解教育の鍵概念としては認知、情動、態度・行動がある（倉知、1992）。また石井ら（1997）は「態度」、「行動」、「技能」、「性格」の 4 項目をあげ、山岸（1995）は「カルチュラル・アウェアネス」、「自己調整能力」、「状況調整能力」の 3 項目とそれらに関連する「感受性」をあげ、「異文化対処能力」測定を試みている。このように異文化理解能力の獲得に関する測定や量的調査、または帰国前・帰国後教育プログラムのような再適応ケアに関連するものはあるが、留学した学生が帰国後、第三者から異文化理解能力の獲得に関する説明を受ける機会はほとんどなく、留学前と後での自身の変化や具体的な成長を振り返る機会も限られているといえる。

**短期留学の教育的価値：**短期留学の学術的成果や教育的価値を検証する研究は多く、Rubin & Sutton（2001）は留学で得られる成果を アカデミック（知識とスキルの開発）と ノンアカデミック（情緒的、態度的、個人的成長）の 2 つに分け、足立（2010）は、留学の成果を 学問・学術的学び、外国語運用能力の獲得、異文化適応能力の獲得、人間的成長、の 4 つに分類してその教育的価値に言及している。更に留学の教育的効果の中でも語学に特化した研究もあり、例えば木村（2011）は短期研修参加者を対象に英語力の向上についてテスト検証したところ、特にリスニング力に関して伸びが認められたと報告し、更に学習ストラテジーの使用度も高くなっていることから、英語学習に対してより自律性を身につけたのではないかと推察している。このように留学の教育的価値に関して様々な報告はあるが、内容は帰国直後の調査に言及しているものが多く、縦断的追跡調査及び個人に焦点を当てた研究は少ない。

## 2．研究の目的

政府は 2020 年までに大学生の短期留学を 2 倍に増やす目標を掲げた。これは少子高齢化や社会のグローバル化が急速に進展する中、グローバルな人材を育成するには異文化理解の促進や国際的素養を培うことが重要であるとし海外留学派遣の意義を示している。しかし海外留学の教

育的効果についての研究や報告は数多くあるが、留学が学習者個人の意識に与える影響に着目した調査、及び留学前後の学習者自身の変化や成長を学習者自身が客観的に把握できるようなシステム構築に関する研究はほとんどない。そのため本研究は短期留学が学習者の意識に与える影響を学習者個人の視点から究明し、それらを学習者にフィードバックすることにより、学習者が体系的・視覚的に自身の変化や成長が把握できる「学びの意識化フレームワーク」を構築することを目的とする。

### 3．研究の方法

本研究では留学での学びを可視化する手法として内藤(1993)の開発した個人別態度構造分析（PAC 分析）を使用する。これは被験者に対し、ある刺激に対しての自由連想をさせ、連想語同士の類似度を評定させた結果をクラスター分析し、作成したデンドログラムをもとにインタビューを行い個人毎に態度構造の分析を行う手法であり、被験者が主体となる手法であると同時に客観性・再現性が高い質的・量的研究の特徴がある。末田(2001)は、PAC 分析は事例的研究を理論へと発展させる可能性を持った手法であることが期待できるとし、質問紙や聴き取り調査では表面化しにくい部分や被験者が意識していない部分にも理解が及ぶ研究手法であるといえる。

### 4．研究成果

本研究は留学が与える影響に関する質的調査の一端として、アメリカ、カナダ、オーストラリア、アイルランド、ニュージーランドの 5 か国にある大学付属の研修機関で語学プログラム（英語）を受講した都内私立大学の学生 18 名を対象に要素の抽出と学びの構造を把握することを試みた。本研究では留学直後に出現した影響を「短期的影響」、また帰国後 1 年経過してから出現した影響を「長期的影響」と定義し、主観的な測定がデータとして客観的に扱われることを通じて異文化理解教育にとって大きな意義を持つことが示唆された。

本研究はまず短期留学が学習者の意識に与える影響を調査するため、留学前後の異文化観の変容を個人別態度構造分析により学習者の視点から究明し、留学による影響を短期的影響と長期的影響の 2 つの観点から考察し、最後に、これら個人別態度構造分析により得られた結果を学習者(被験者)にフィードバックすることにより、学習者が体系的・視覚的に自身の変化・成長を把握し、分析できる学びの意識化フレームワークを構築することを目的とした。

本研究では留学の長期的影響に関する一考察として個人別態度構造分析を使用し、学生 18 名を対象に 3 年間（計 144 回）の縦断調査を行った。その中で 異文化観の変容、留学による短期的影響と長期的影響の考察、学習者に対する学びの意識化の構築と異文化理解教育への展開の 3 点から成果と学術的意義を報告する。

本研究から、帰国後の想起項目やデンドログラムを見る限り、帰国後はより“表現の慎重さ”が表出する傾向にあるということが指摘できた。つまり留学前の異文化観の大部分はメディアからの影響が強く（萩原，2012）留学前の異文化や外国人に対するイメージの大半がテレビなどから得たものであったものが、ある国に滞在し多くの人と会うことで多様性に触れ、逆に単純な言葉で“異文化”を想起することが難しくなり、これが“文化に対する表現や言葉の慎重さ”に繋がったのではないかと分析している。また留学前も留学後も被験者の異

文化観は「人に着目」した表現でほぼ占められており、異文化観イコール人そのものであるといえる。本研究において 18 名のデータを分析すると留学前は断定的な表現が数多く表出していたが、帰国後は 30.6%減少し、客観的な表現は 155%増となるなど、データからは留学により、被験者はより「客観的」な立場で異文化を見るようになった様子がうかがえた。また学習者に対する留学の影響を調査する中で、類似するクラスターがどの学習者からも同様に出現しており、それらは本研究内の抽出とコーディング作業により 1.「認知・知識面」、2.「精神面」、3.「語学面（英語）」、4.「行動面」、の 4 つを分類項目として提示した。留学直後の短期的影響では認知・知識面と行動面の出現が最も多かったが、長期的影響では行動面が最多となり（45%増）、認知・知識面が 45%減となった。このことから留学は、まず個人における認知や知識面、意識や価値観に影響を及ぼし、その後 1 年をかけて個人の経験の中で長期的に被験者の行動面（積極的になった、自信がついた等）に影響を与えた可能性を指摘した。また長期的影響では語学面が消滅したことからも語学のスキルは“自信”となって個人の「行動面」への成長や変化に移っていったと推測するのが自然であると結論つけた。さらに留学前後、及び一年後の振り返り作業により個人における自己での対話が進みそれが異文化理解教育として機能しうるか試みたが、これは被験者が帰国後、自身の主観が客観視化されたデンドログラムを見比べることで、自身の変化や成長を感じることができ、自己内における対話が進み異文化理解教育に寄与しうる可能性を見出した。また本手法はある文化の一部をむやみに切り取りステレオタイプ化することを避け、“自分の文化的経験を俯瞰的に振り返りながらその経験を理解していく”という本来の異文化理解教育にはあまり触れられることのなかった新たな視点を提示した。これは学びの意識化への構築の際に、被験者の全員が本プロセスは自身の留学の振り返りに機能していると回答し、一連の学びの意識化は留学で得たもの、感じたものを心に留めておくだけでなく、他者に説明することで記憶として頭に整理され、他者との共有の中に更なる学びがあったといえ、留学前後の変化を学習者自らが視覚的に実感する事そのものが学びの意識化フレームワークとして異文化理解教育の中で機能しうる可能性を見出した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 前田ひとみ	4. 巻 27
2. 論文標題 個人別態度構造分析による留学の長期的影響 - 3年間の縦断調査による国際理解教育における新たな試み -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際理解教育	6. 最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田ひとみ	4. 巻 26
2. 論文標題 留学による短期的・長期的影響に関する一考察 - 個人別態度構造分析による留学の教育的価値 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 目白大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 pp.1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 前田ひとみ	4. 巻 25
2. 論文標題 異文化理解教育における新たな試み - 個人別態度構造分析による日本人学生の留学前後における異文化観の変容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 目白大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Hitomi Maeda	
2. 発表標題 A Study on Short- and Long-term Impacts of Studying Abroad: The Educational Value of Study Abroad Through Personal Attitude Construct Analysis	
3. 学会等名 Comparative and International Education Society（国際学会）	
4. 発表年 2023年	

1．発表者名 前田ひとみ
2．発表標題 短期留学が学習者の意識に与える影響と学びの意識化フレームワークの構築
3．学会等名 目白大学・目白大学短期大学部 第1回全学FD研修会研究発表
4．発表年 2021年

1．発表者名 Hitomi Maeda
2．発表標題 The Educational Value of Study Abroad Programs: The Transformation of Cross-cultural Views After Studying Abroad
3．学会等名 63rd Annual Conference of the Comparative and International Education Society (CIES) （国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 前田ひとみ
2．発表標題 個人別態度構造分析による留学の教育的価値：短期的・長期的影響に関する一考察
3．学会等名 日本国際理解教育学会第29回
4．発表年 2019年

1．発表者名 前田ひとみ
2．発表標題 個人別態度構造分析による異文化観に関する心象の一考察
3．学会等名 異文化間教育学会第39回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 前田ひとみ
2．発表標題 個人別態度構造分析による留学前後における異文化観の変容
3．学会等名 日本国際理解教育学会第28回大会
4．発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------